

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和四年八月二十日(土曜日) 午後五時開演

狂言 樋の酒(ひのさけ)

主人は太郎冠者に米蔵を、次郎冠者には酒蔵を預けて外出します。酒蔵に入った次郎冠者はさつそく酒を飲み始めます。窓からのぞいた太郎冠者も飲みたくなります。それぞれ持ち場を離れずに次郎冠者が太郎冠者に酒を飲ませてやるには、窓から樋を渡して流すことを思いつきます。それが面倒になると、太郎冠者が持ち場を離れ、酒蔵に入ります。どれだけ飲んでも酒が減るようには見えず、二人は舞えや謡えの酒盛りに興じます。そこへ主人が帰宅して叱りますが、太郎冠者の酔いは急には醒めない様子です。

能 通小町(かよいこまち)

八瀬の山里に夏安居(ひと夏外出せずに修行すること)する僧(ワキ)の庵を、毎日木の実と爪木を持って訪れる女(ツレ)がいます。市原野に住むという女は僧の求めに応じて持参した木の実の名を数え上げ、名乗りを促されると「小野とはいはじ薄生ひたる・・・」という言葉を残して消え失せます。それが小野小町の歌の一部であることを思い出した僧は、弔いのために市原野へ出掛けます。そこへ弔いを喜ぶ小町の亡霊と、跡を追って深草の四位の少将(シテ)が現れます。生前少将が小町のもとに百夜通い詰めた物語は僧も知っていて、懺悔による罪滅ぼしを二人に勧めます。小町から少将へ百夜通え、姿を変えよと不誠実な注文が相次ぎましたが、少将はそれが虚言であるとは知らず、百夜目も祝言の酒杯を思い描きながら仏戒を保とうとした生真面目な少年です。虚言と知り憤死したはずですがそれには触れず、百夜通いを二人して再現したことで、実は小町も僧のもとに通い詰めたことで、共に成仏できました。

(西村 聡)

シ テ (深草少将)

面 (瘦男)

黒頭

厚板

色大口

水衣

腰帯

扇

笠

(無地熨斗目を披く)